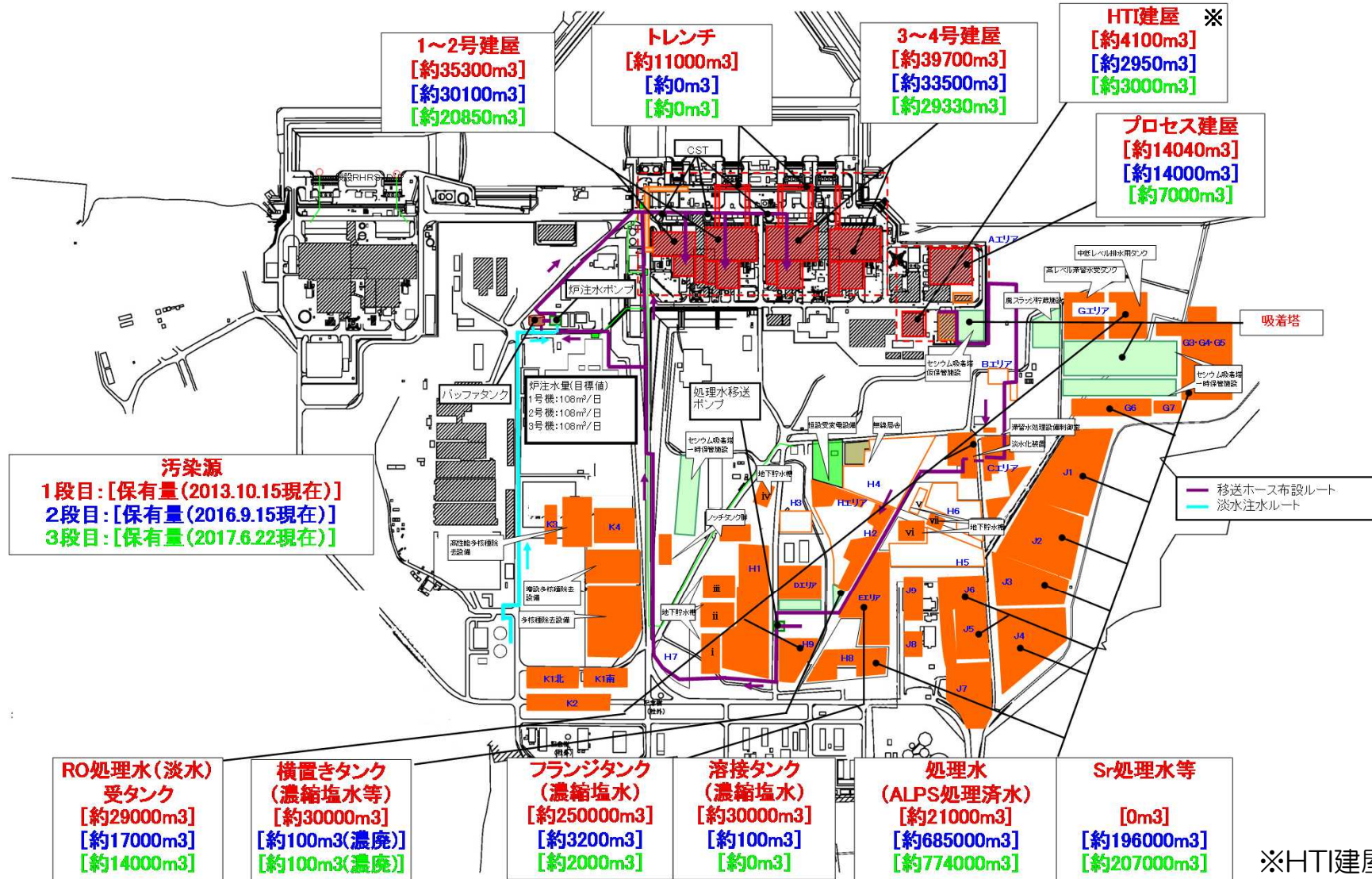


参考1-1 リスクマップ詳細

(1) 汚染水の貯蔵状況

- 建屋貯蔵量：サブドレン水位低下に合わせた建屋水位低下に伴い、水量が徐々に減少。
- タンク貯蔵量：建屋内滞留水・Sr処理水の処理により処理水(ALPS処理済水) が増加。



※HTI建屋：高温焼却炉建屋

注：濃縮廃液は廃棄物として処理していく

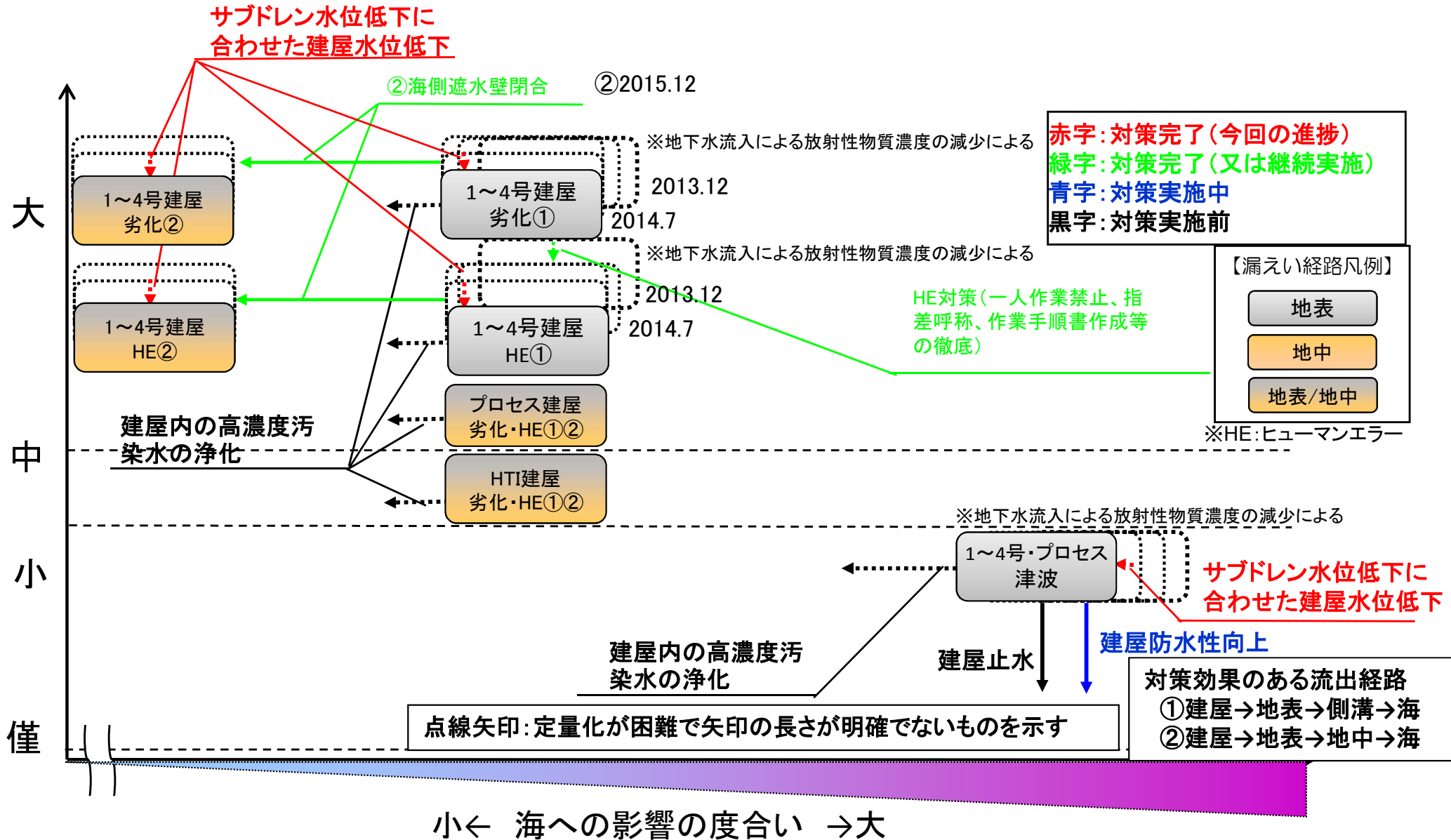
(2) 各貯蔵箇所毎のリスクの低減状況

- 2017.7現在の各対策の進捗状況に鑑み、リスクの低減状況を評価した。
- 具体的には、以下の貯蔵箇所について、漏えいが発生するイベント（経年劣化、ヒューマンエラー、地震、津波等）毎に実施された対策の効果をリスクマップを用いて評価した。
- 前回評価（2016.9）以降には、以下の対策が進捗している。
 - ・ サブドレン水位低下に合わせた建屋水位低下に伴い、水量が徐々に減少。
 - ・ フランジタンク解体により、フランジタンク基数が減少。
 - ・ 濃縮塩水(残水)の溶接タンクをSr処理水用に全て転用。

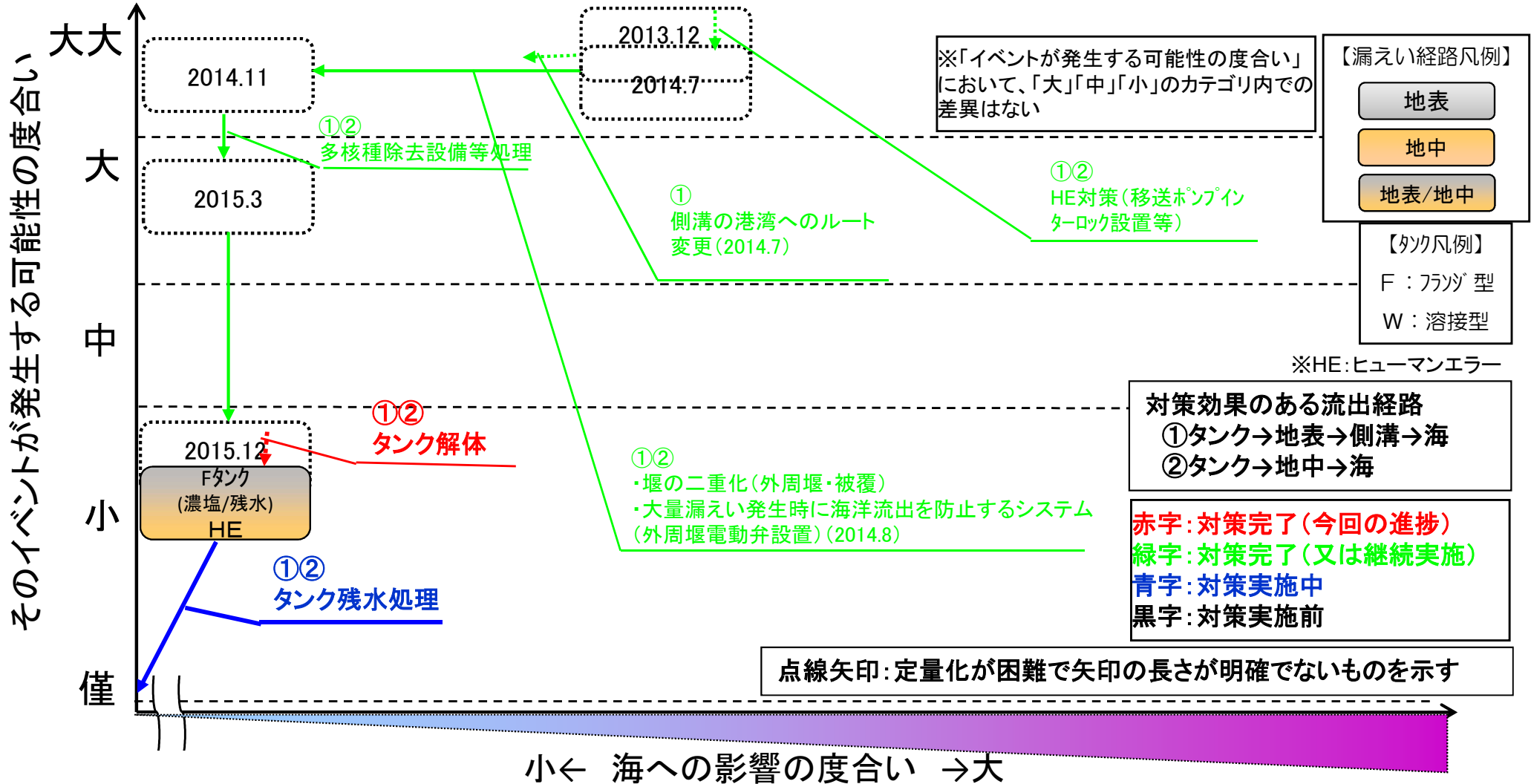
No.	貯蔵箇所
①	建屋
②	フランジタンク（濃縮塩水）
③	溶接タンク（濃縮塩水）
④	横置きタンク（濃縮廃液）
⑤	フランジタンク（ALPS処理水）
⑥	溶接タンク（ALPS処理水）
⑦	フランジ／溶接タンク（Sr処理水）

■ 1～4号機建屋については、サブドレン水位低下に合わせた建屋水位低下に伴い、水量が徐々に減少。

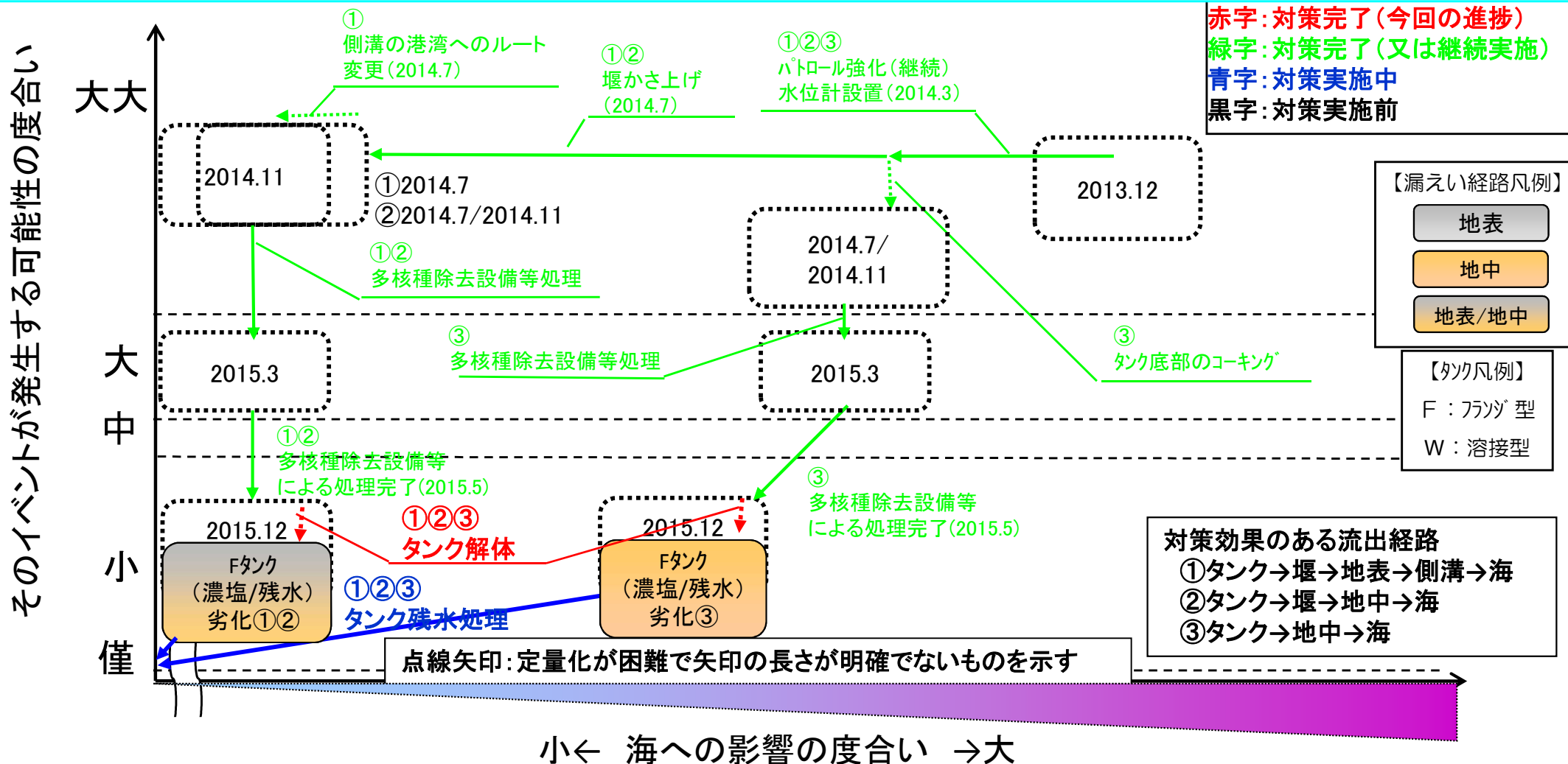
そのイベントが発生する可能性の度合い



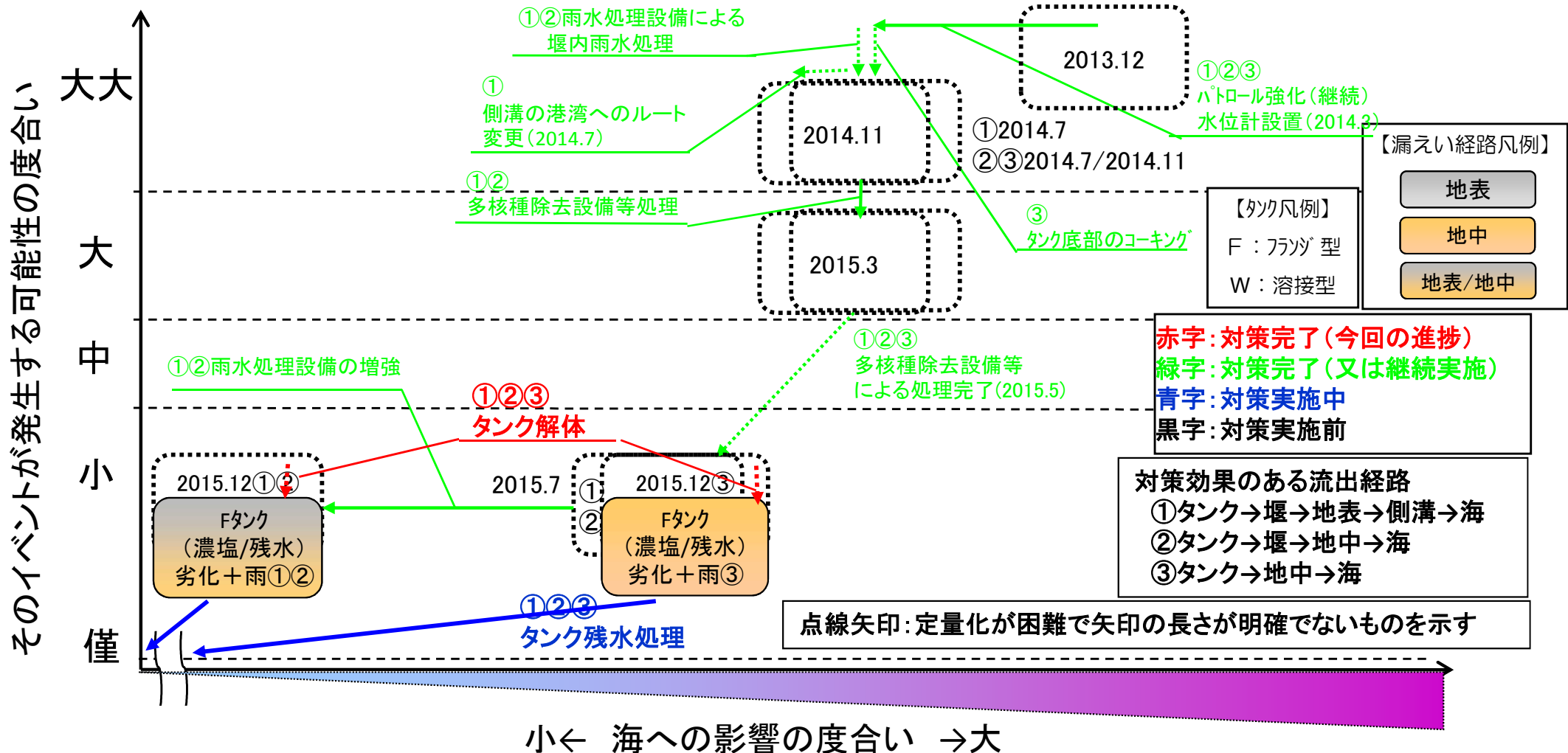
- 多核種除去設備やその他の浄化設備により、タンク底部の残水を除き、2015年5月に濃縮塩水の処理が完了。
- 残水処理にあたっては、安全を最優先に考え、ダストの飛散防止・被ばく防止対策等を十分に施しながら、タンク解体時に順次処理。
- フランジタンク解体の進捗により、フランジタンク基数が減少。**



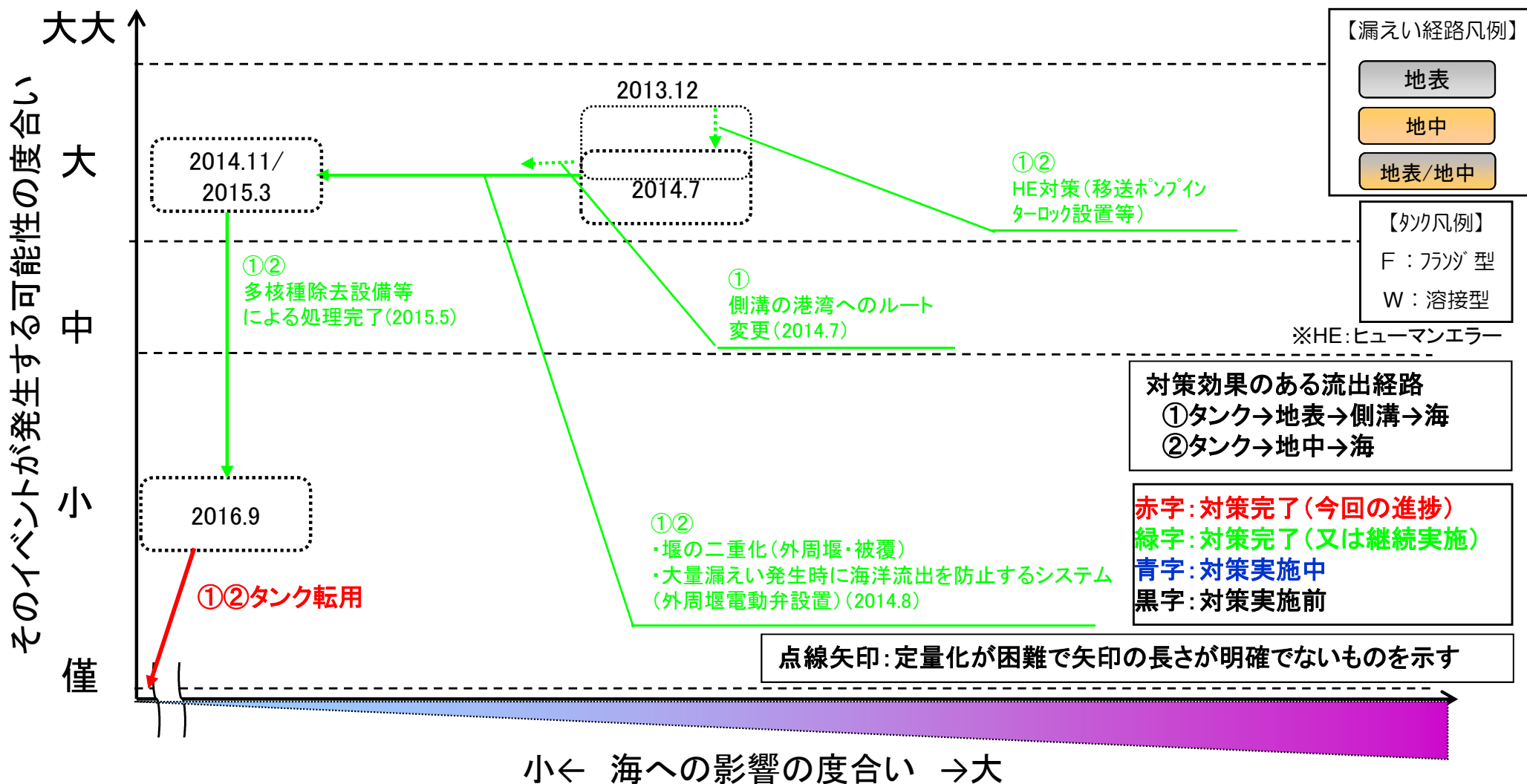
- 多核種除去設備やその他の浄化設備により、タンク底部の残水を除き、2015年5月に濃縮塩水の処理が完了。
- 残水処理にあたっては、安全を最優先に考え、ダストの飛散防止・被ばく防止対策等を十分に施しながら、タンク解体時に順次処理。
- フランジタンク解体の進捗により、フランジタンク基数が減少。



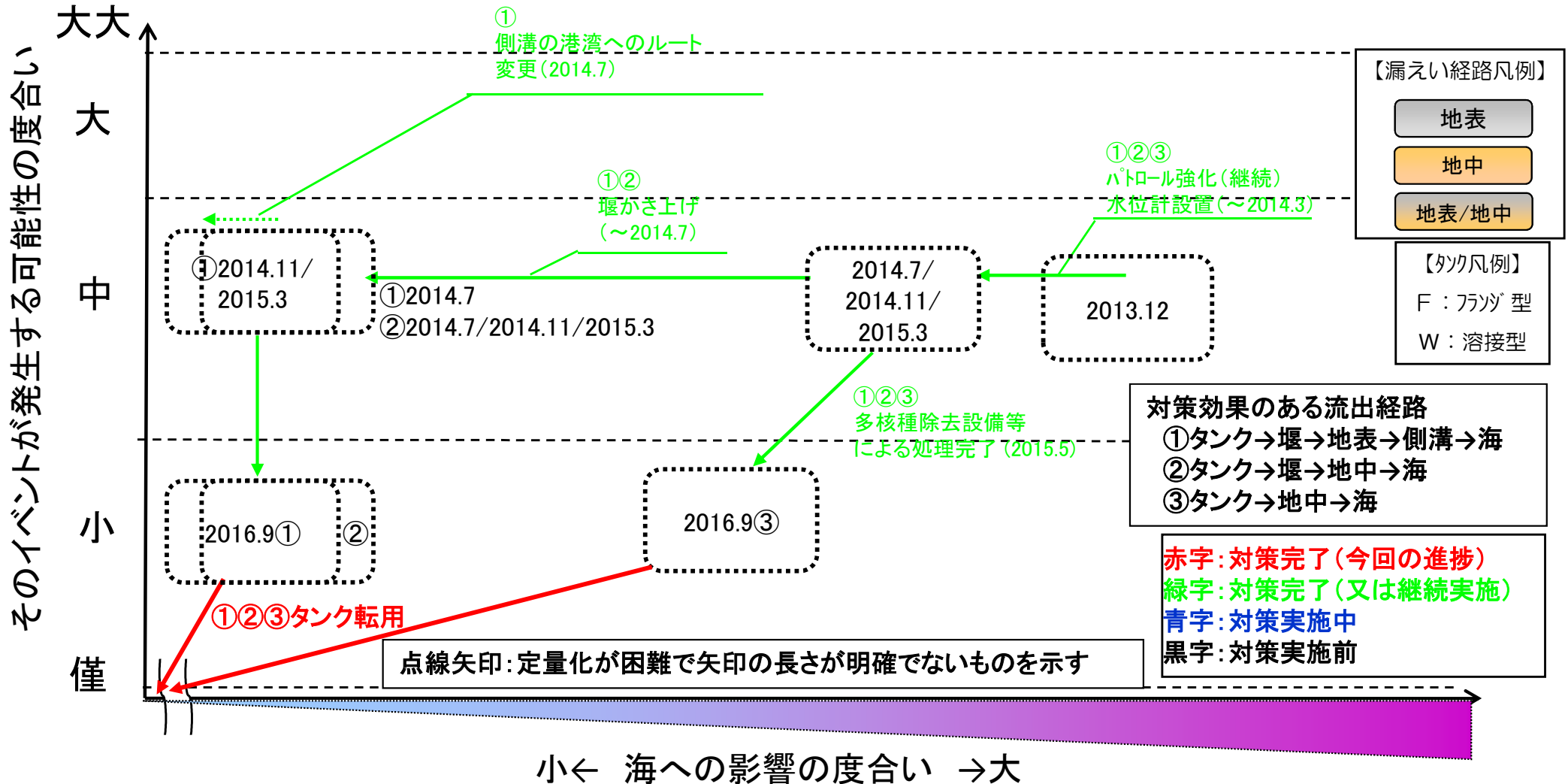
- 多核種除去設備やその他の浄化設備により、タンク底部の残水を除き、2015年5月に濃縮塩水の処理が完了。
- 残水処理にあたっては、安全を最優先に考え、ダストの飛散防止・被ばく防止対策等を十分に施しながら、タンク解体時に順次処理。
- フランジタンク解体の進捗により、フランジタンク基数が減少。**



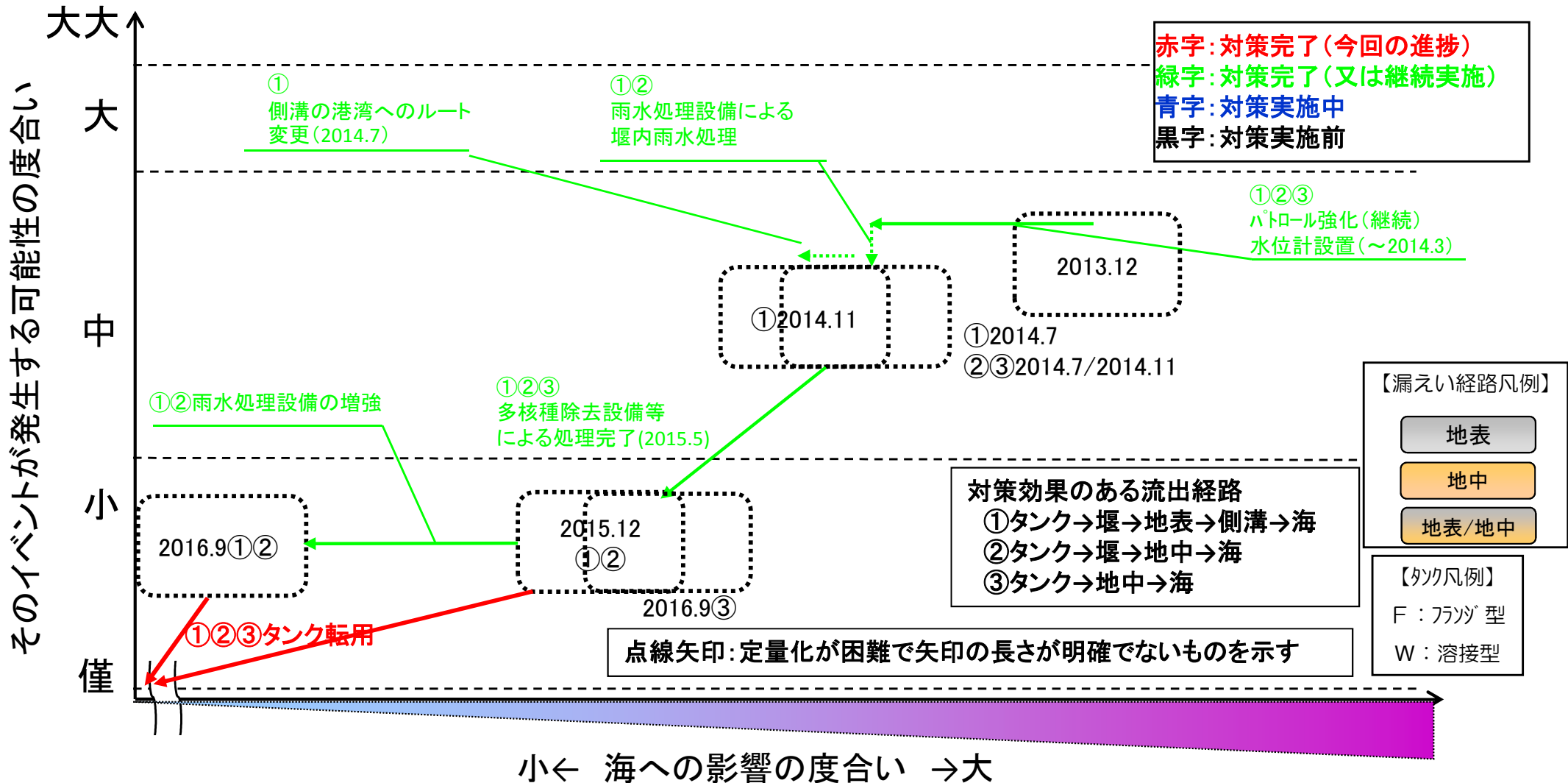
- 多核種除去設備やその他の浄化設備により、タンク底部の残水を除き、2015年5月に濃縮塩水の処理が完了
- 濃縮塩水の溶接タンクをSr処理水用に全て転用。



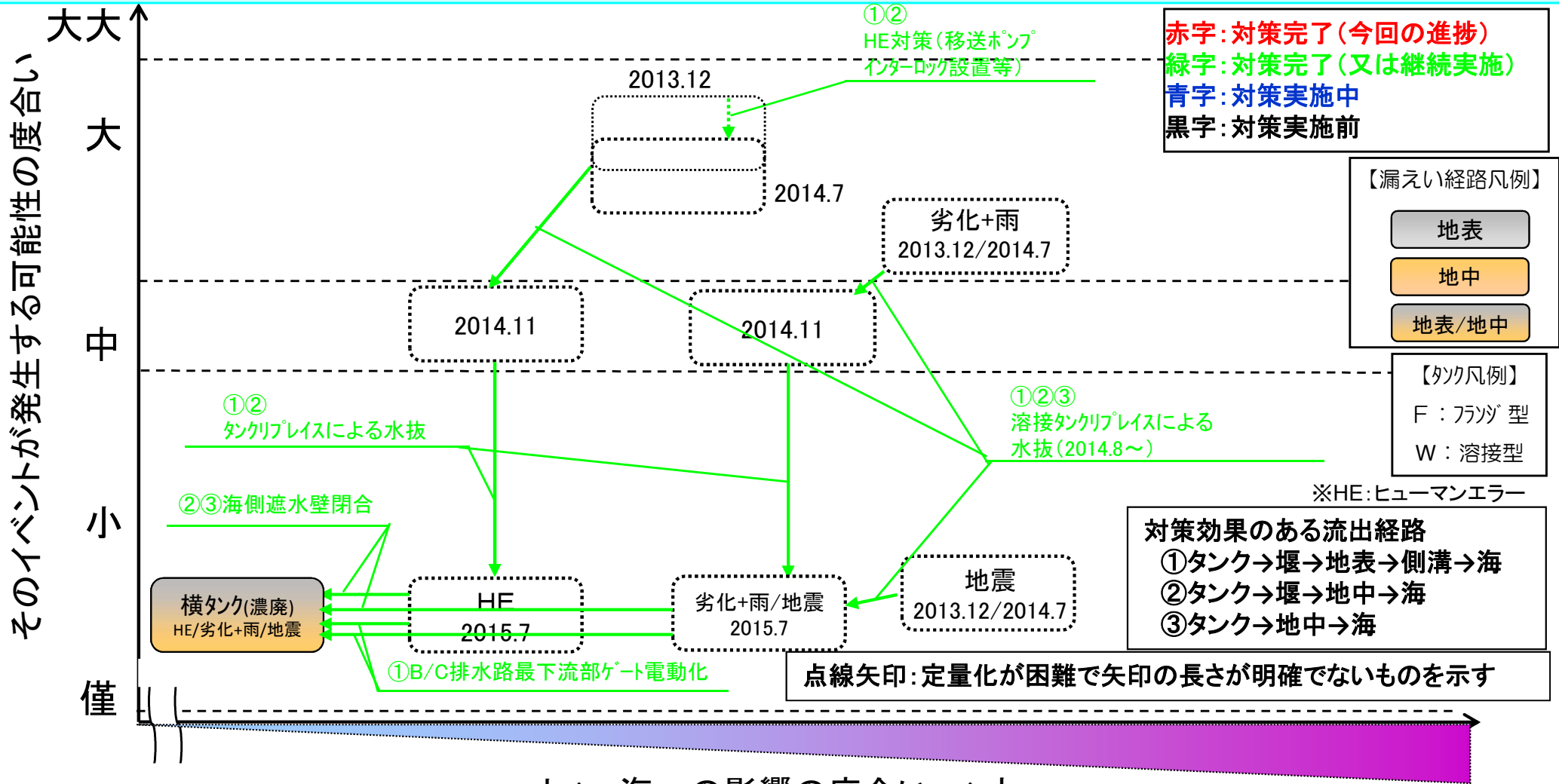
- 多核種除去設備やその他の浄化設備により、タンク底部の残水を除き、2015年5月に濃縮塩水の処理が完了
- 濃縮塩水の溶接タンクをSr処理水用に全て転用。



- 多核種除去設備やその他の浄化設備により、タンク底部の残水を除き、2015年5月に濃縮塩水の処理が完了
- 雨水処理設備の増強により、降雨時の漏えいリスクが低減。
- 濃縮塩水の溶接タンクをSr処理水用に全て転用。

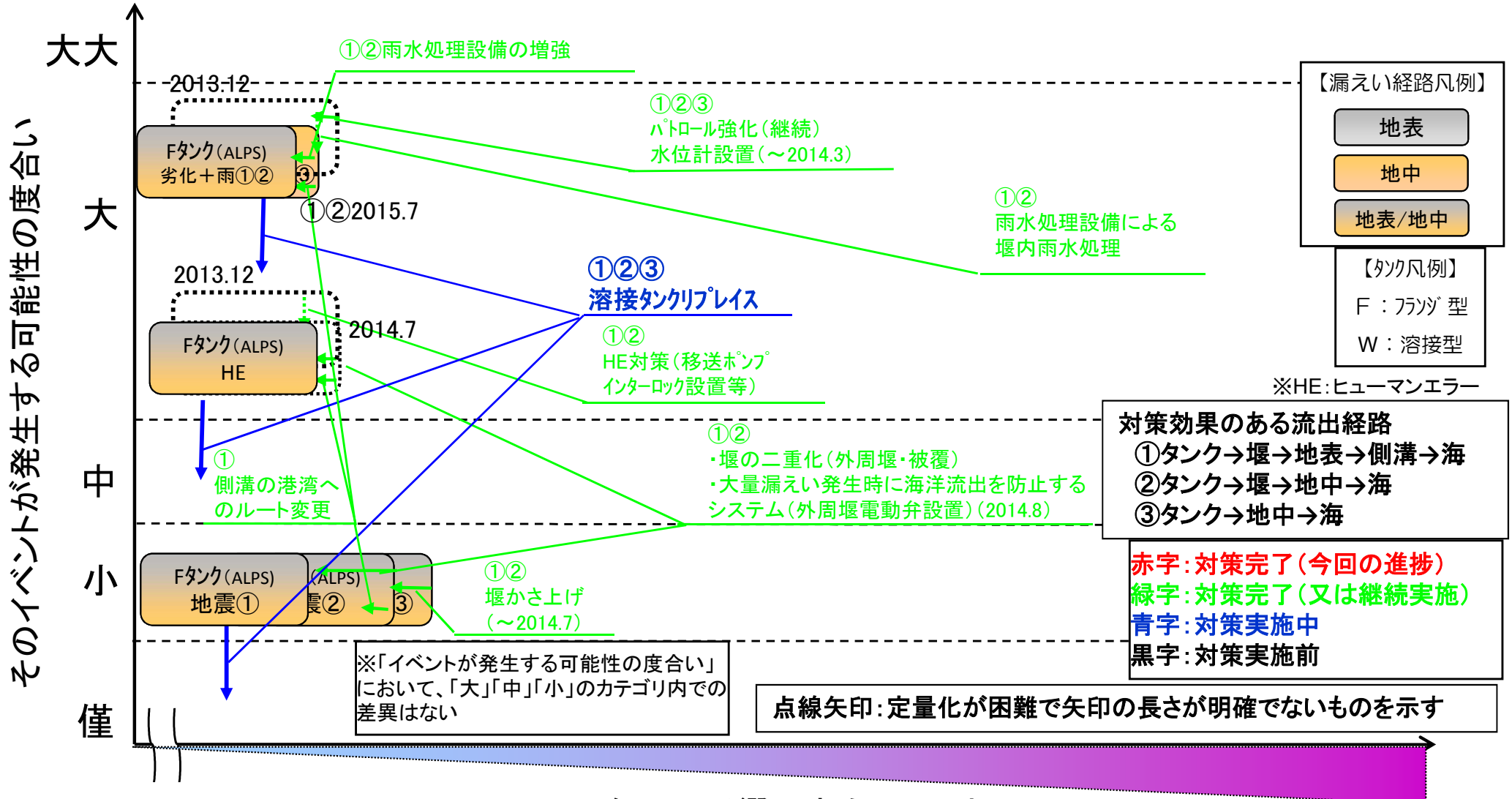


- 横置きタンクよりポンプでくみ上げ可能な汚染水を除去し、タンクの撤去を実施中。
- 海側遮水壁の閉合により、地中を経由し護岸付近の地下水から海洋への流出が抑制。
- B/C排水路最下流部のゲート電動化により、地表での大量漏えい時の海洋流出が抑制
- 残留するスラッジ分は、水処理二次廃棄物と同等の管理とする。

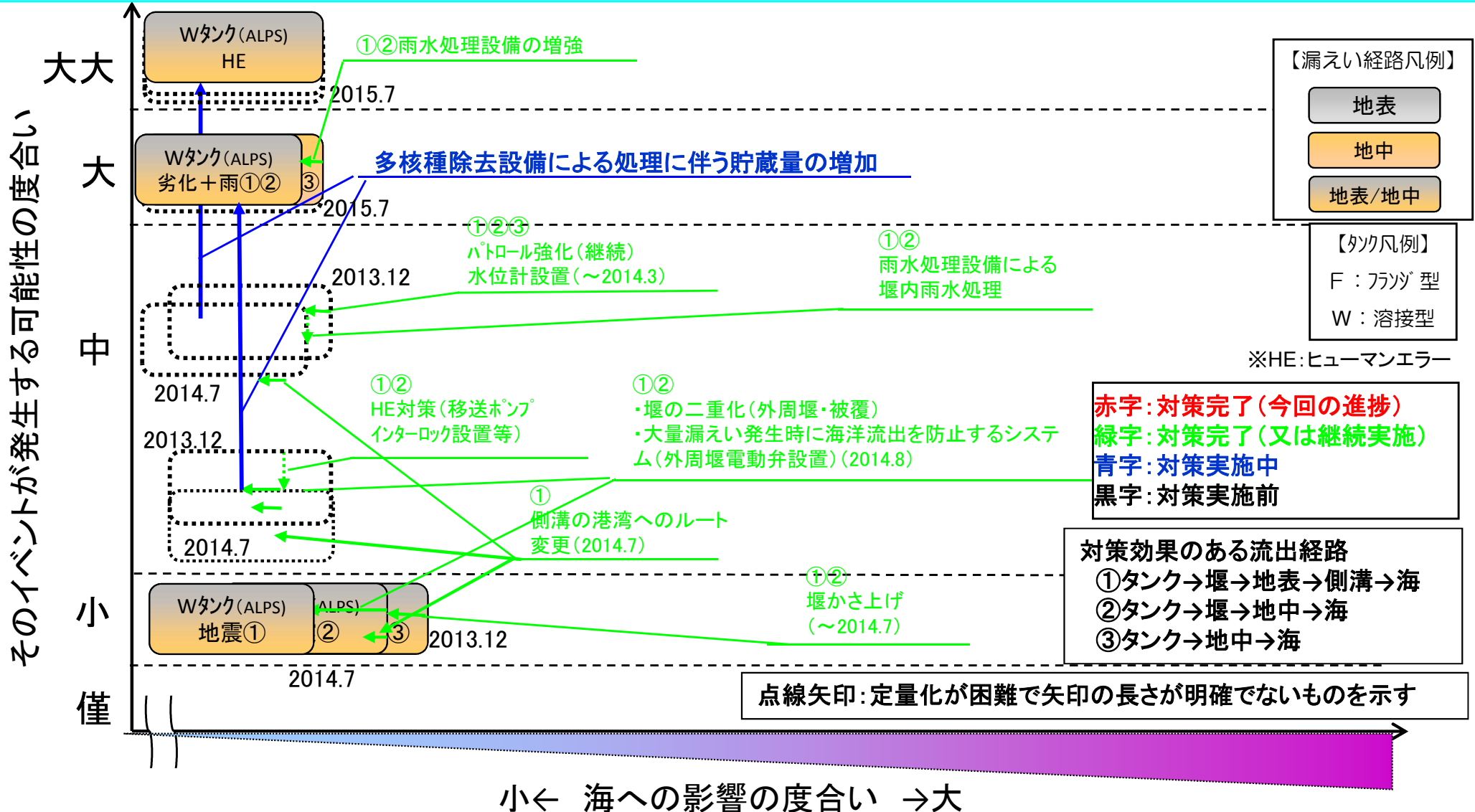


小 ← 海への影響の度合い → 大

- 雨水処理設備の増強により、降雨時の漏えいリスクが低減
- タンクリプレイスにより、劣化による漏えいリスクを低減。



- 雨水処理設備の増強により、降雨時の漏えいリスクが低減
- スロンチウム処理水の処理に伴い、継続的に処理水貯蔵量が増加中 (イベント発生可能性の度合いが増大)。



- 雨水処理設備の増強により、降雨時の漏えいリスクが低減
- B/C排水路最下流部のゲート電動化により、地表での大量漏えい時の海洋流出が抑制
- ストロンチウム処理水については、多核種除去設備で再度処理を実施中。

